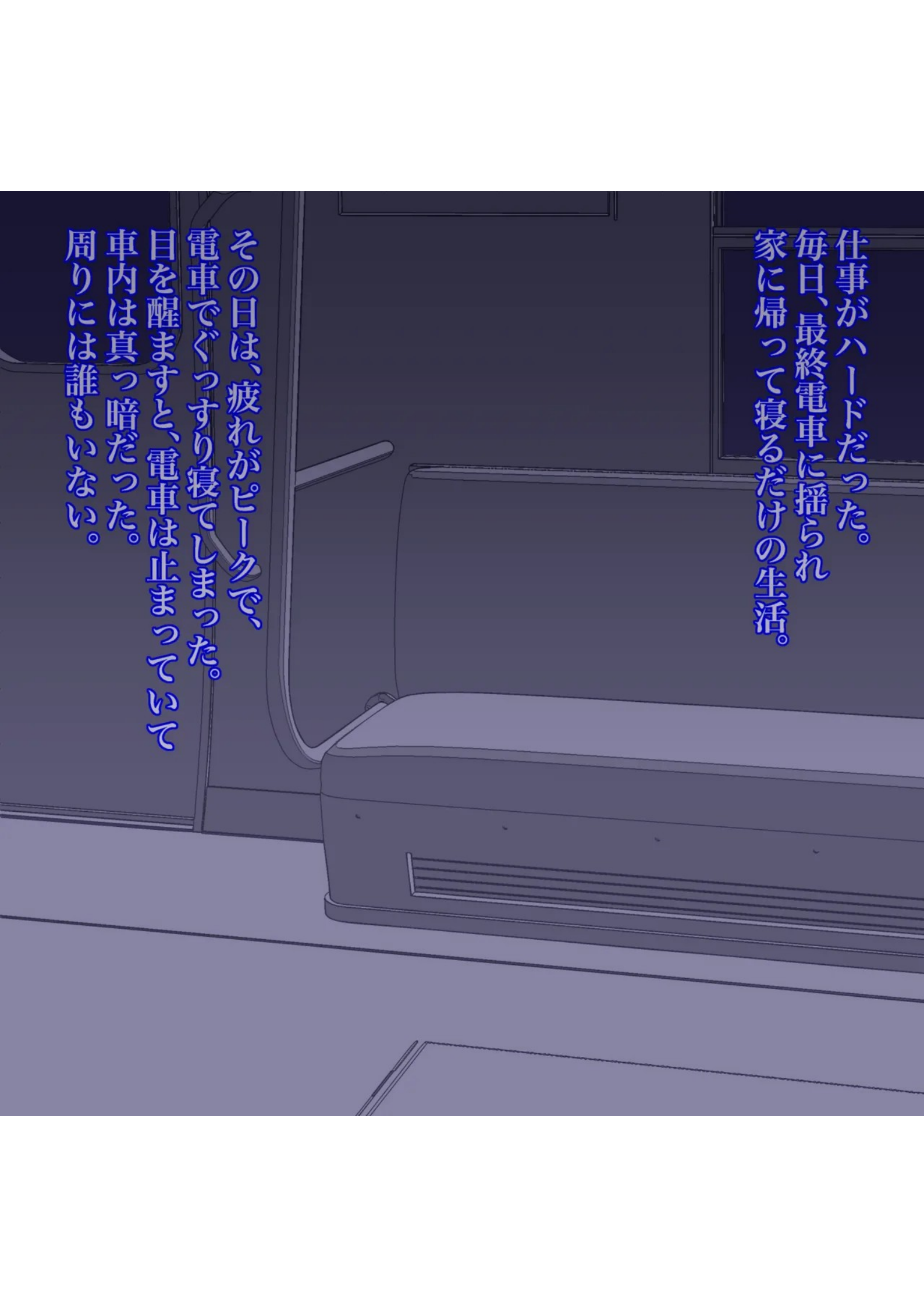




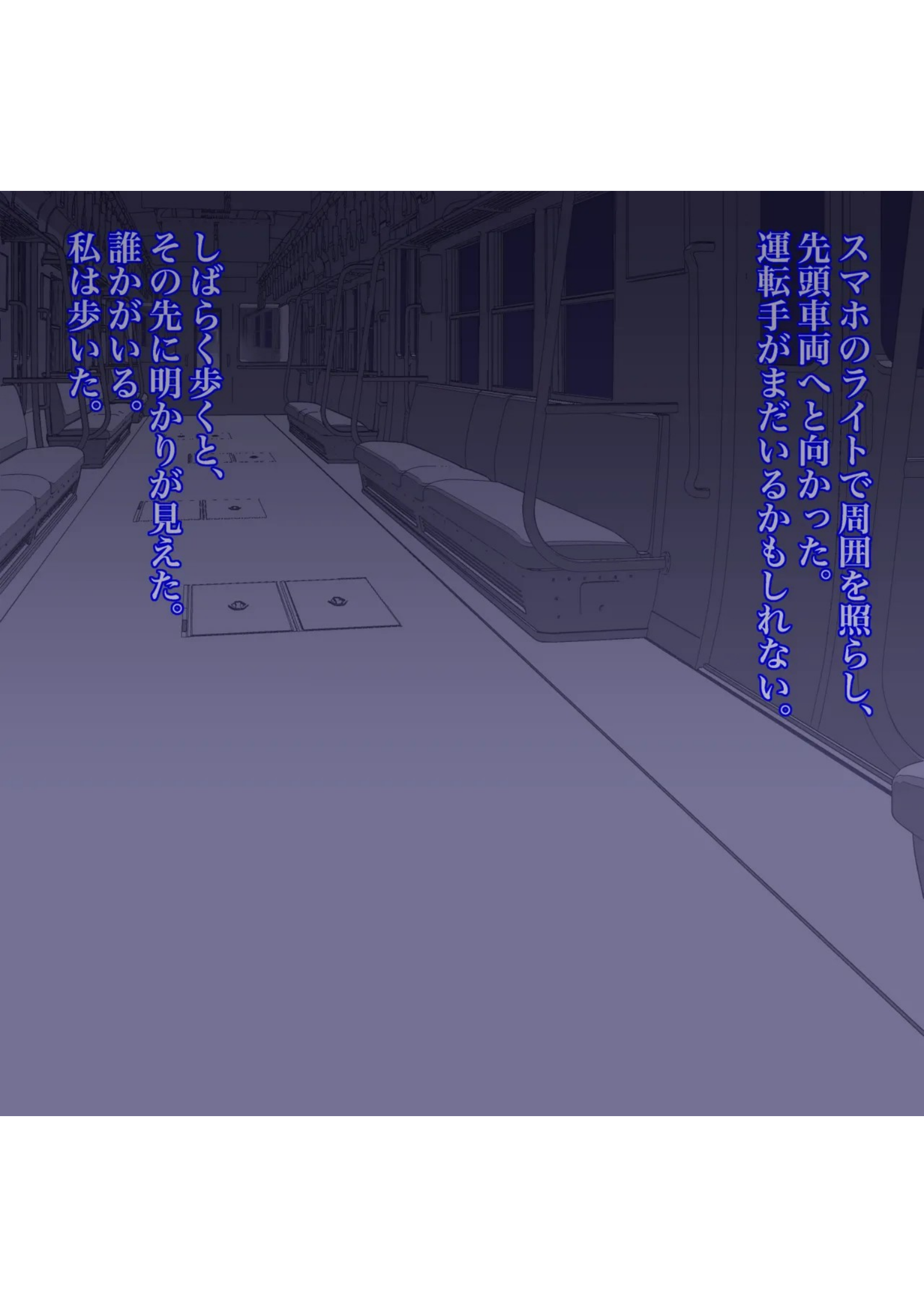
# 男の娘最終輪姦電車

STUDIO  
**BASS LINE**  
EXPLICIT CONTENT



仕事ハードだった。  
毎日、最終電車で揺られ  
家に帰って寝るだけの生活。

その日は、疲れがピークで、  
電車でぐっすり寝てしまった。  
目を醒ますと、電車は止まっていて  
車内は真っ暗だった。  
周りには誰もいない。



スマホのライトで周囲を照らし、  
先頭車両へと向かった。  
運転手がまだいるかもしれない。

しばらく歩くと、  
その先に明かりが見えた。  
誰かがいる。  
私は歩いた。

重い扉を開けると、  
異様な光景が目に入ってきた。  
暗がりにも男が二人、  
女子高生を囲んでいた。



咄嗟に目を逸らしたが  
遅かった。  
ムツチャこつち見てる。  
完全に気づかれています。





男が睨みながら、  
こちらに歩いてくる。

おい

お前ここで  
何してんだ

見たよな？

いや……  
あの……

いや……何も  
見てません……



おい、  
こっち来い

胸ぐらを掴まれ、  
無理矢理、  
引き摺られる。

ぐいっ

そして、その子の前に  
無理矢理、  
連れてこられた。  
男たちが私の処遇について  
話を始める。  
嫌な雲行きだ。

おい、どうする？  
誰かいるなんて、  
思わないよなあ

ヤツに  
聞くか？

そうだな

男はスマホを取り出し、話をし始めた。

通話を終え、男は言った。

ソイツにもやらせろってさ



男が私の胸ぐらを掴む。  
私は、すごい力で  
羽交い締めになされ  
自由を奪われた。

ぐ

これ、預かるから  
逃げるなよ

動けないところを  
スマホを奪われた。  
まずい。  
逃げられない。

男に頭を小突かれ、  
女の子がひざまずく。



女の子は  
私のズボンに  
手をかけた



私のものを取り出すと、  
手で刺激を与えはじめた。



柔らかく、暖かい手の感触。  
萎えていた私のもものも  
徐々に大きくなってくる。



大きくなつたのを確かめると、  
手を止め、ゆっくり舐め始めた。  
いやらしい音が車内に響く。



丁寧な、舌を這わせ、  
焦らすように、ゆっくり  
舐めていく。



舌で丹念に  
敏感なところを舐めると、  
ゆっくり口にふくんだ。  
口内に貯まった唾液が暖かい。



先っぽが、  
暖かく湿った口内に  
包み込まれる。  
いやらしい音が  
車内に響き渡る。





動画も撮られている。  
これで逃げることは  
できないだろう。



いやらしい音が響く。  
唾液が口のはしから  
溢れ出す。



ちゅっぽ。

ちゅっぽ。

しゅっ

じゅっ

深く、深く  
くわえこむ。  
喉の奥に  
当たるような感触。

ビビビビビ

グ  
ム  
ツ

ア  
ア  
ア

オ  
エ...

オ  
フ...

シ  
ャ...



目の端に涙をためながらも、  
深く浅くを、気持ちが良い速さで繰り返す。

ぽろぽろぽろ

おエ  
ごちがごち  
るるるるるる



ビュルッビュルッ  
ビュルッビュルッ!!

びゅん  
びゅん  
びゅん  
びゅん





口の端から  
溢れた精液を  
丁寧に集め  
指でぬぐいとると  
全て、コクリと  
飲み込んだ。



終わったか？  
じゃあ、  
ここで見てろ

男は、そう言うと、  
スマホをしまった。  
奴は、ずっと動画を撮っていた。  
私は拘束を解かれ、  
脇へどかさされた。



スマホを奪われ、  
写真を撮られた私は、  
逃げるわけにもいかず、  
彼女が  
男たちに犯される様を  
見続けた。







欲望を吐き出し、  
中出しし、



それが終わると、  
次の男が、それに続いた。




より乱暴に  
腰を叩きつけ  
精液を体内に  
吐き出した。



男たちは、  
言葉もなく、  
黙々と行為し、  
それを終えた。





私はその様子をじっと見ていた。  
行為を終えた男が  
近づいてくる。

はい

男は、  
私に向かって、  
強い口調で言った。

お前もやれ

いや……  
でも……

まあ、  
勃つんなら  
……だがな

気づいて  
ないのか？  
あいつ、  
男なんだ

えっ……  
男？

あいつの男に  
頼まれて、  
こうやって  
犯してるんだ。

あいつら  
変態なんだよ

ヤツは、  
隣の車両にいて  
犯されてるのを見て  
喜んでやがるんだ。

えっ……  
あの子が男つてのも  
信じられないのに  
なにそれ……



信じられなかった。

やはり、どう見ても、  
男には見えない。



その子は、  
上目遣いで私を見ていた。

青臭い匂いが、  
辺りに充満している。  
先ほどの男達との  
痴態が脳裏に蘇る。



聞きました？  
僕と『彼』のこと

すいません。なんか  
巻き込んだりやって

本当だよ。  
犯罪に巻き込まれた  
と思ったら、  
ただの変態プレイだよ。



そう思うと、  
なんだか腹が立ってきた。

チキ

僕じゃあ……  
やっぱり魅力  
ないですよね

どう見ても、男には見えない。  
そして、今、  
私は誘惑されていた。



頭の中で、何かが  
切れる音がした。

相手の体に覆いかぶさわり  
口をふさぎ、手を押しこえた。



手を押さえたまま、  
強引にキスをし、  
首筋を舐める。

ググググ

子  
コ  
ロ  
♡

あ♡



甘い吐息が漏れる  
目を閉じる。  
形ばかりの抵抗が  
弱まっていく。





ねえ……

あ♡

甘い体臭と  
青臭い饅えた匂い。  
熱い吐息が頬を撫でる。



いれて……

写真を撮られたことや  
男たちに監視されていることが  
頭をよぎった。  
でも、もう自分の頭では  
考えられなくなっていた。

私は、すでにいきり立っていた  
肉棒を、その、卑猥に口を開けた  
穴にねじり込んでいった。  
それは、すんなりと、  
受け入れられていった。



すでに乱暴にほぐされた穴は私を、すぐ迎え入れ、馴染んだ。私は、欲望のままに、腰を動かした。













行為が終わった後、  
飛び散った精液を  
拭き取りながら、  
荒い息と共に、  
ここから出ていく方法を  
教えてくれた。

後ろの車両から、  
外に出れるから



男から、自分のスマホを返してもらった。  
写真のデータは渡してくれなかった。

私が、この秘密を守らなければ、  
ばら撒かれることになるのだろう。

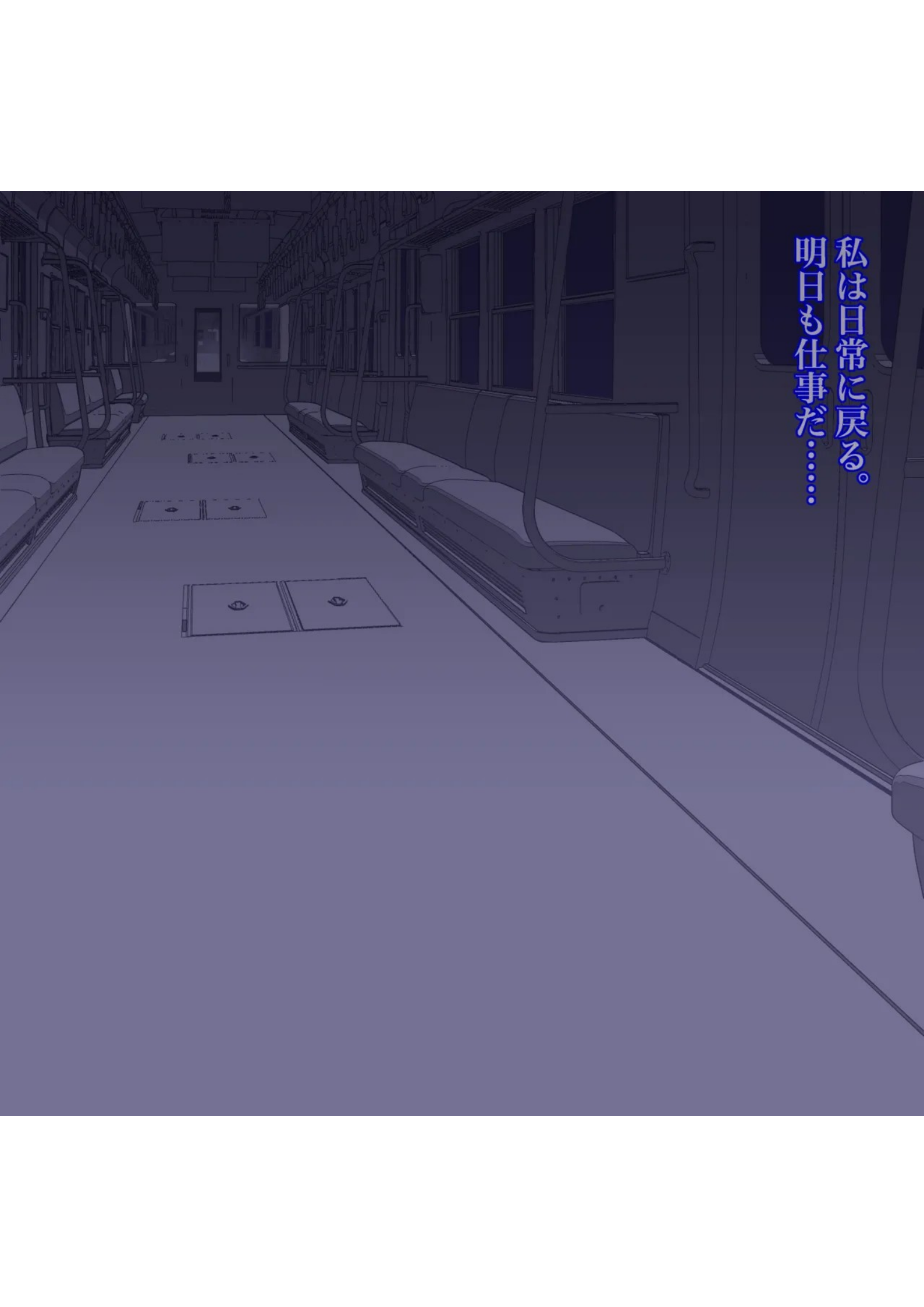


彼らは  
秘密を守るだろう。

今日のことは、  
誰にも言えない。

そして、  
一夜の夢のように、  
思い出すだろう。



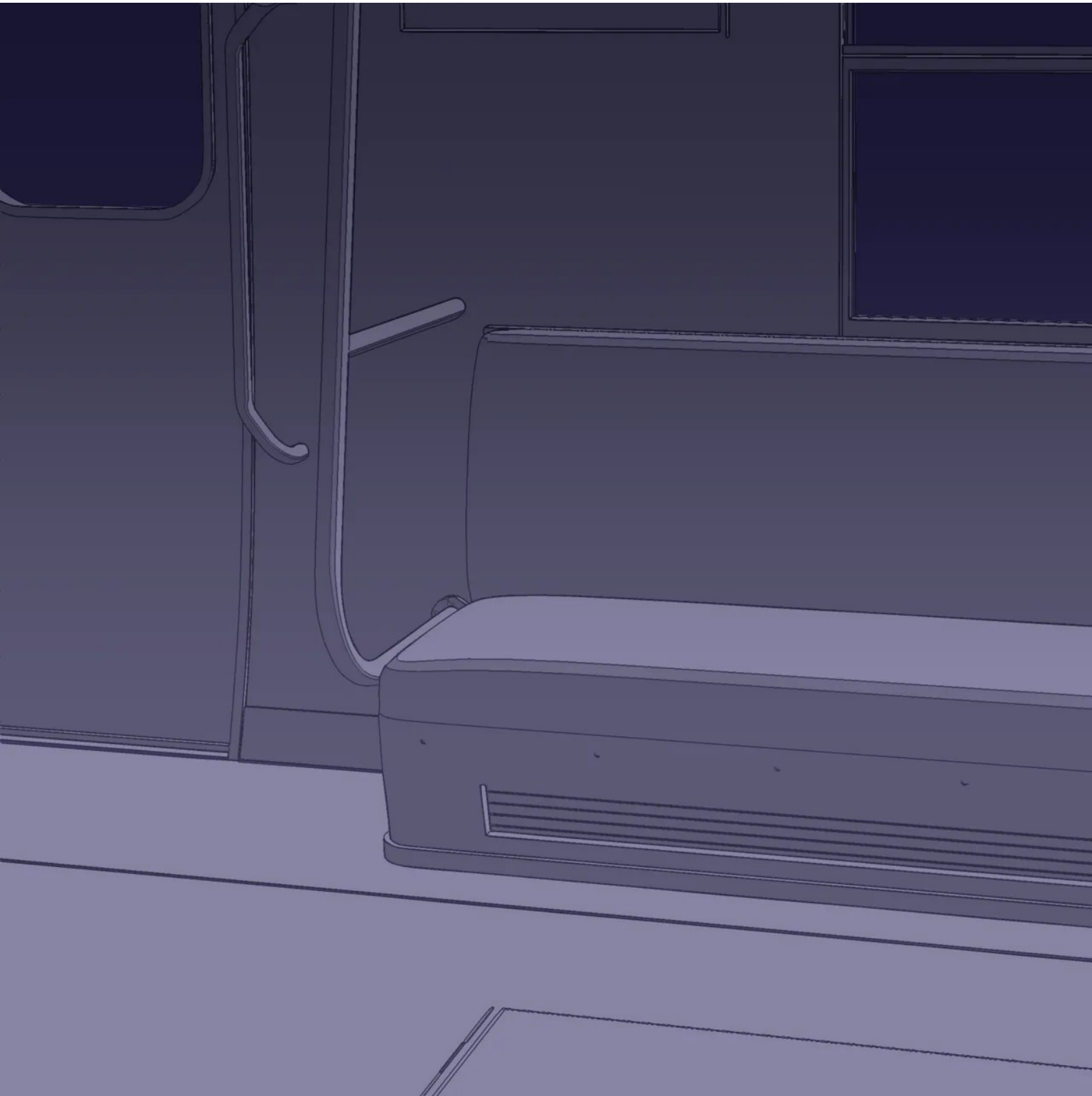


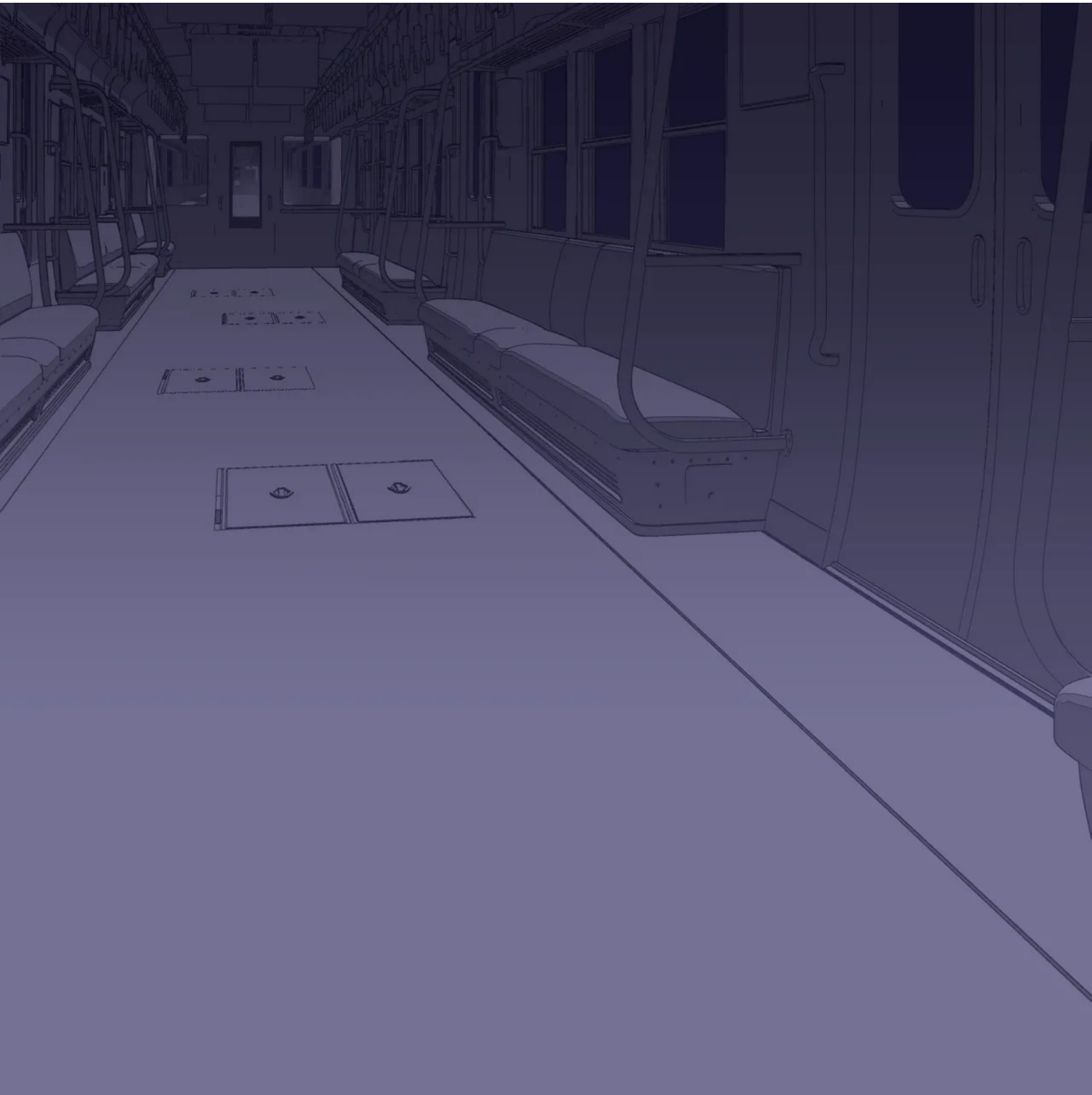
私は日常に戻る。  
明日も仕事だ……



# 男の娘最終輪姦電車

STUDIO  
**BASS LINE**  
EXPLICIT CONTENT









































































































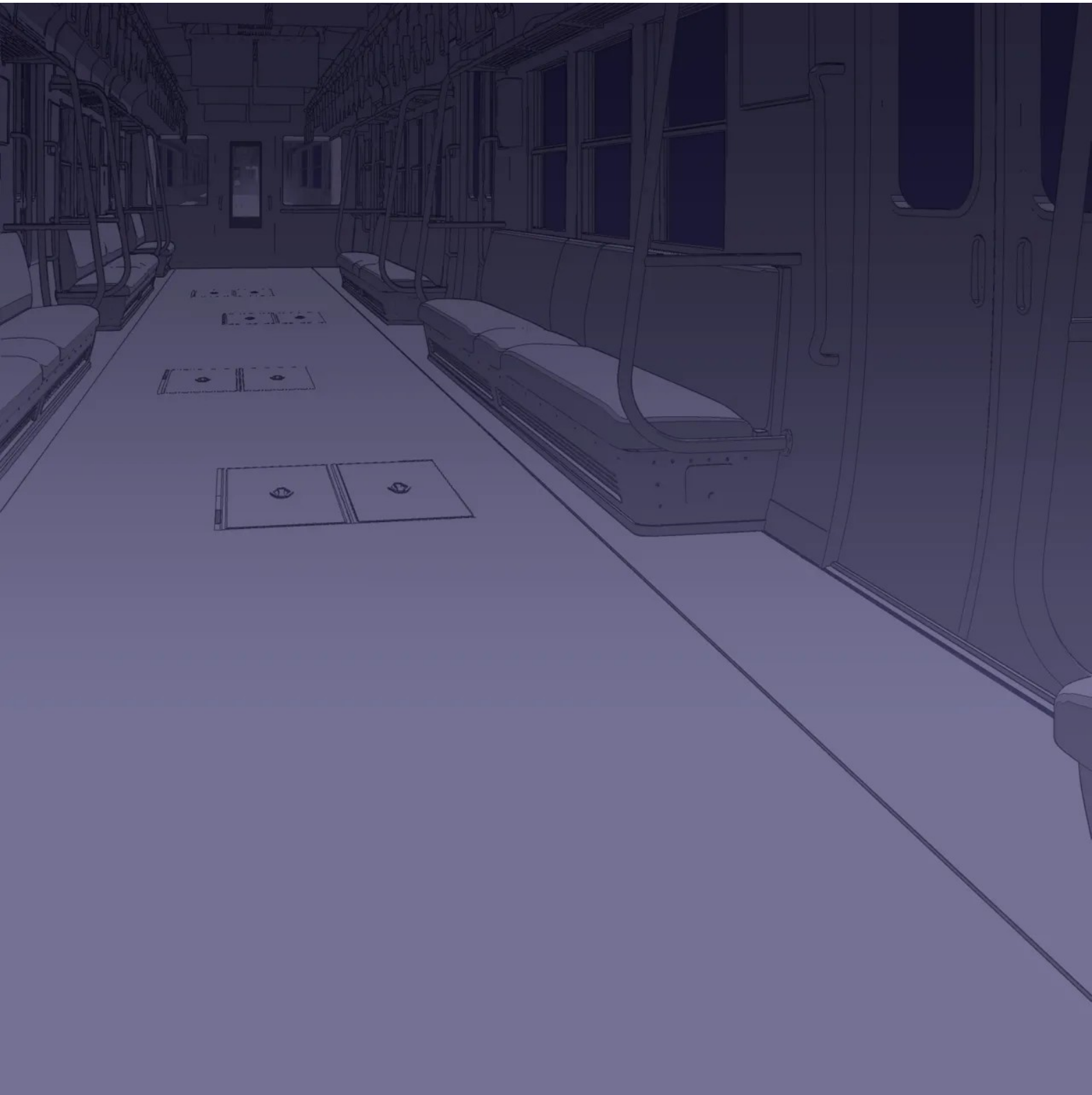






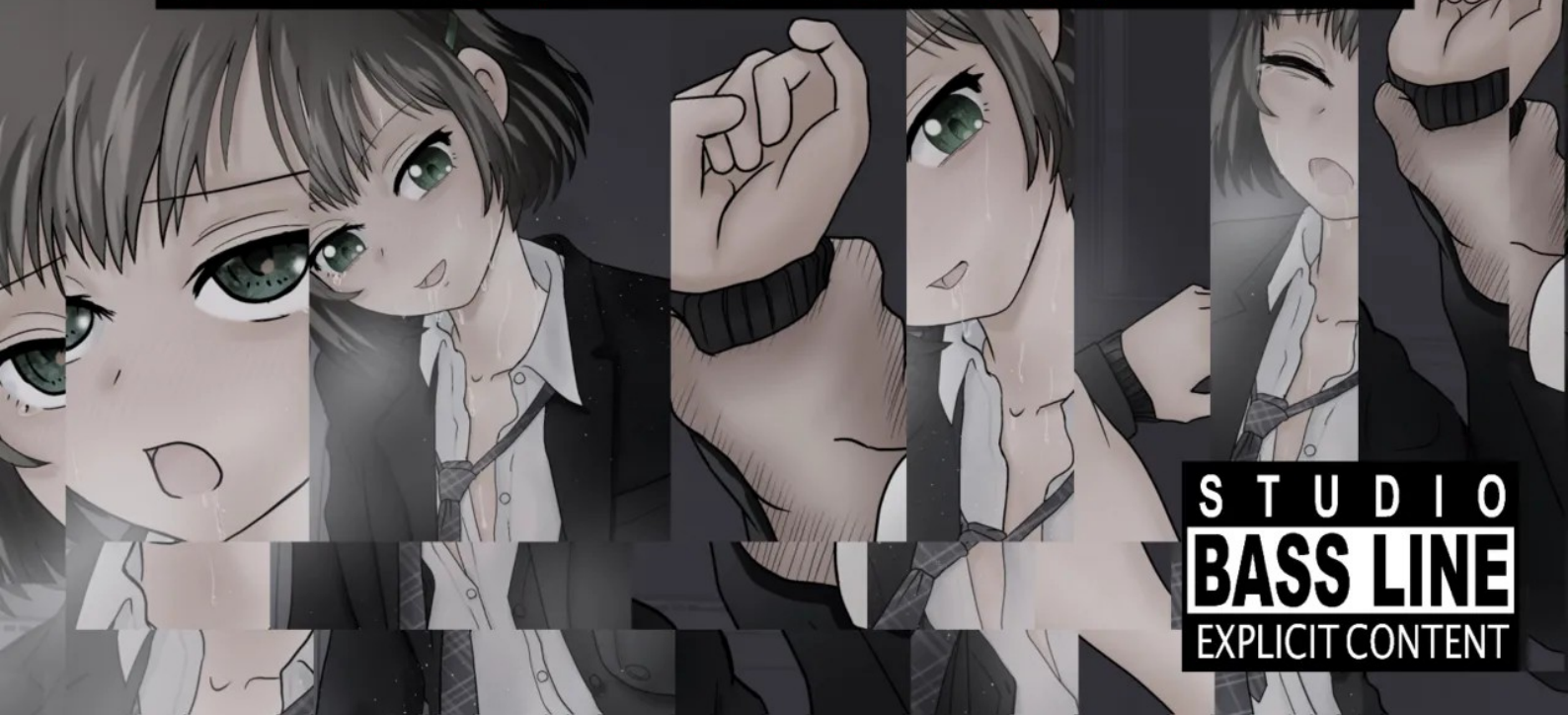




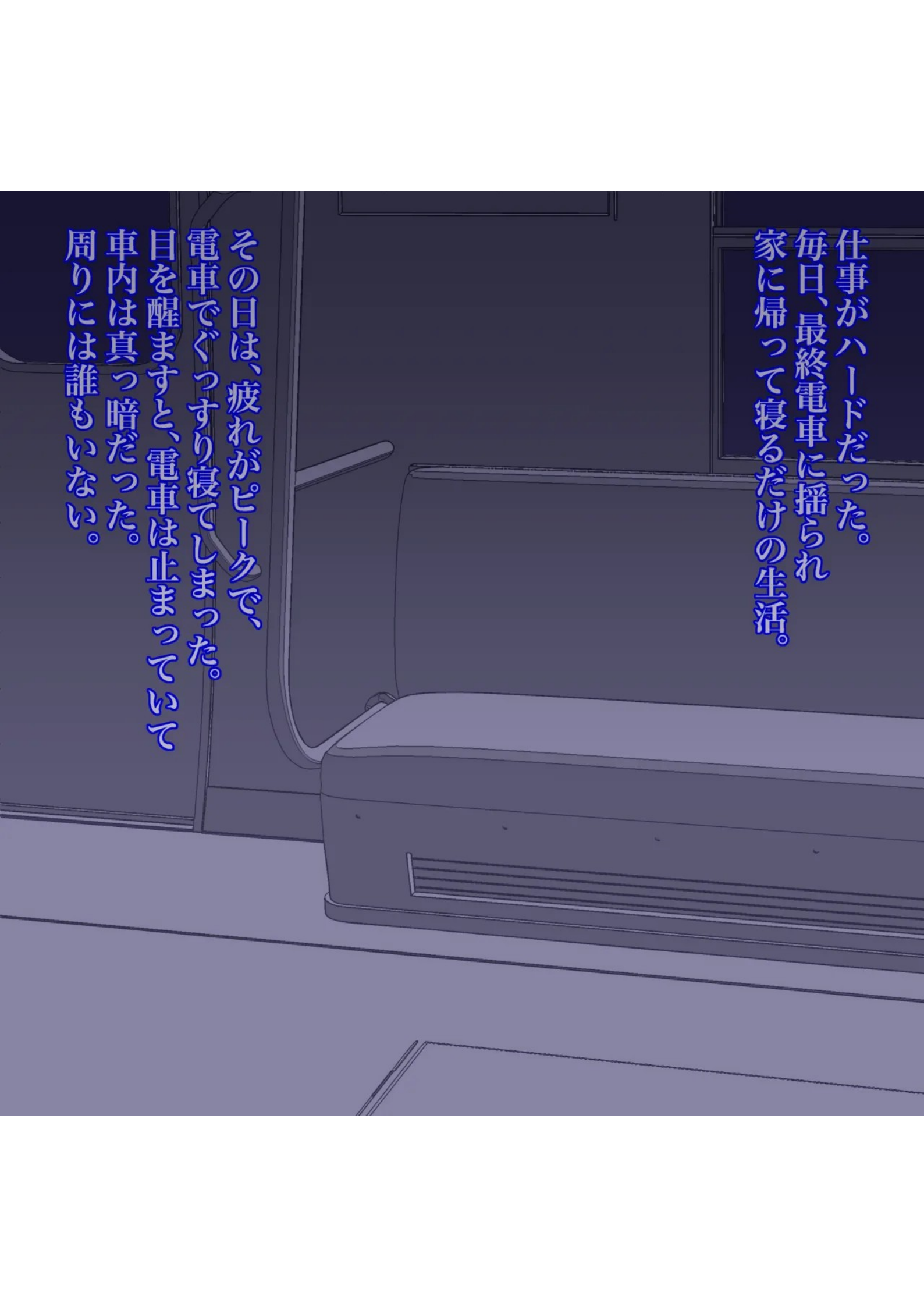




# 男の娘最終輪姦電車

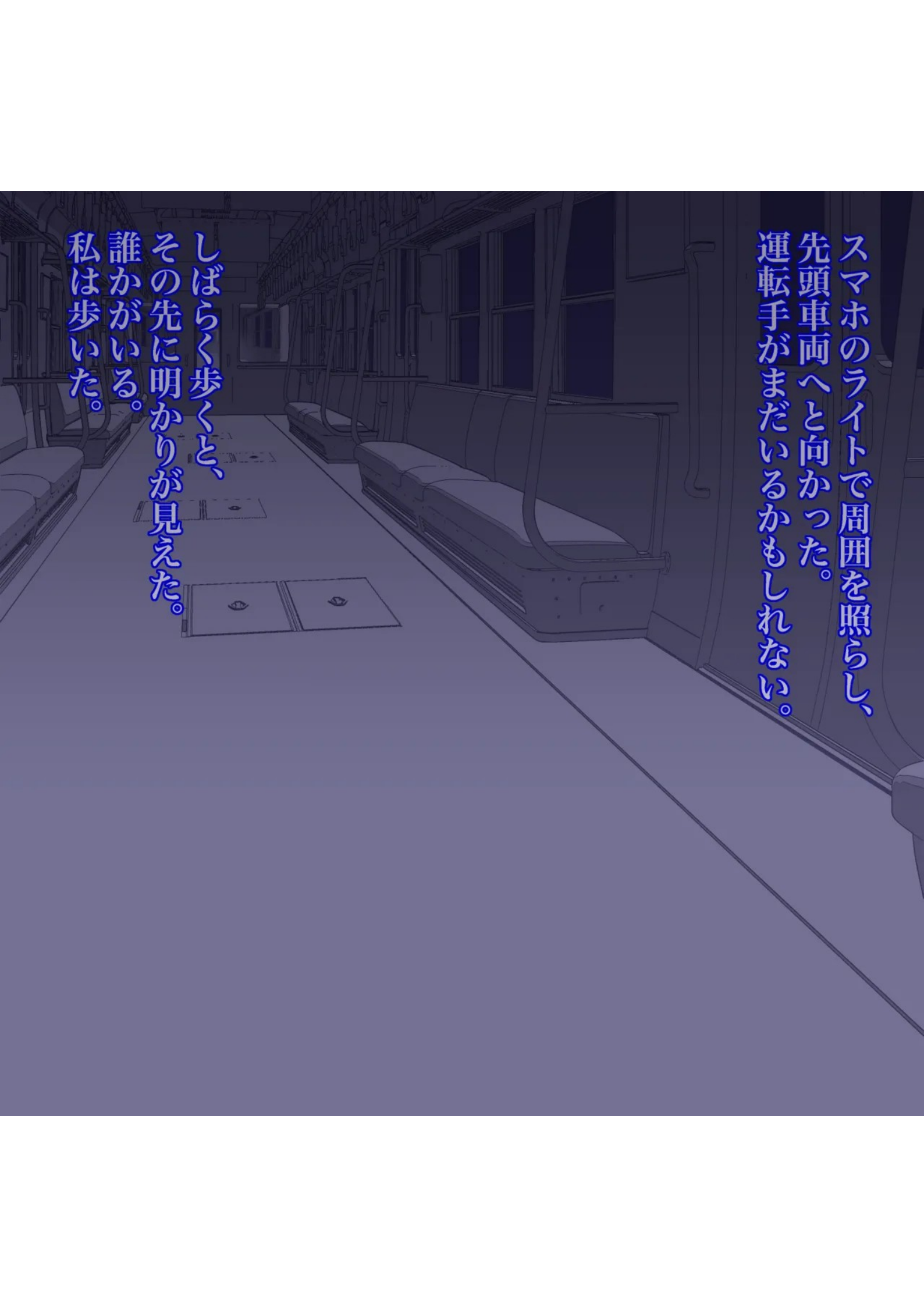


STUDIO  
**BASS LINE**  
EXPLICIT CONTENT



仕事ハードだった。  
毎日、最終電車で揺られ  
家に帰って寝るだけの生活。

その日は、疲れがピークで、  
電車でぐっすり寝てしまった。  
目を醒ますと、電車は止まっていて  
車内は真っ暗だった。  
周りには誰もいない。



スマホのライトで周囲を照らし、  
先頭車両へと向かった。  
運転手がまだいるかもしれない。

しばらく歩くと、  
その先に明かりが見えた。  
誰かがいる。  
私は歩いた。

重い扉を開けると、  
異様な光景が目に入ってきた。  
暗がりにも男が二人、  
女子高生を囲んでいた。



咄嗟に目を逸らしたが  
遅かった。  
ムツチャこつち見てる。  
完全に気づかれています。





おい

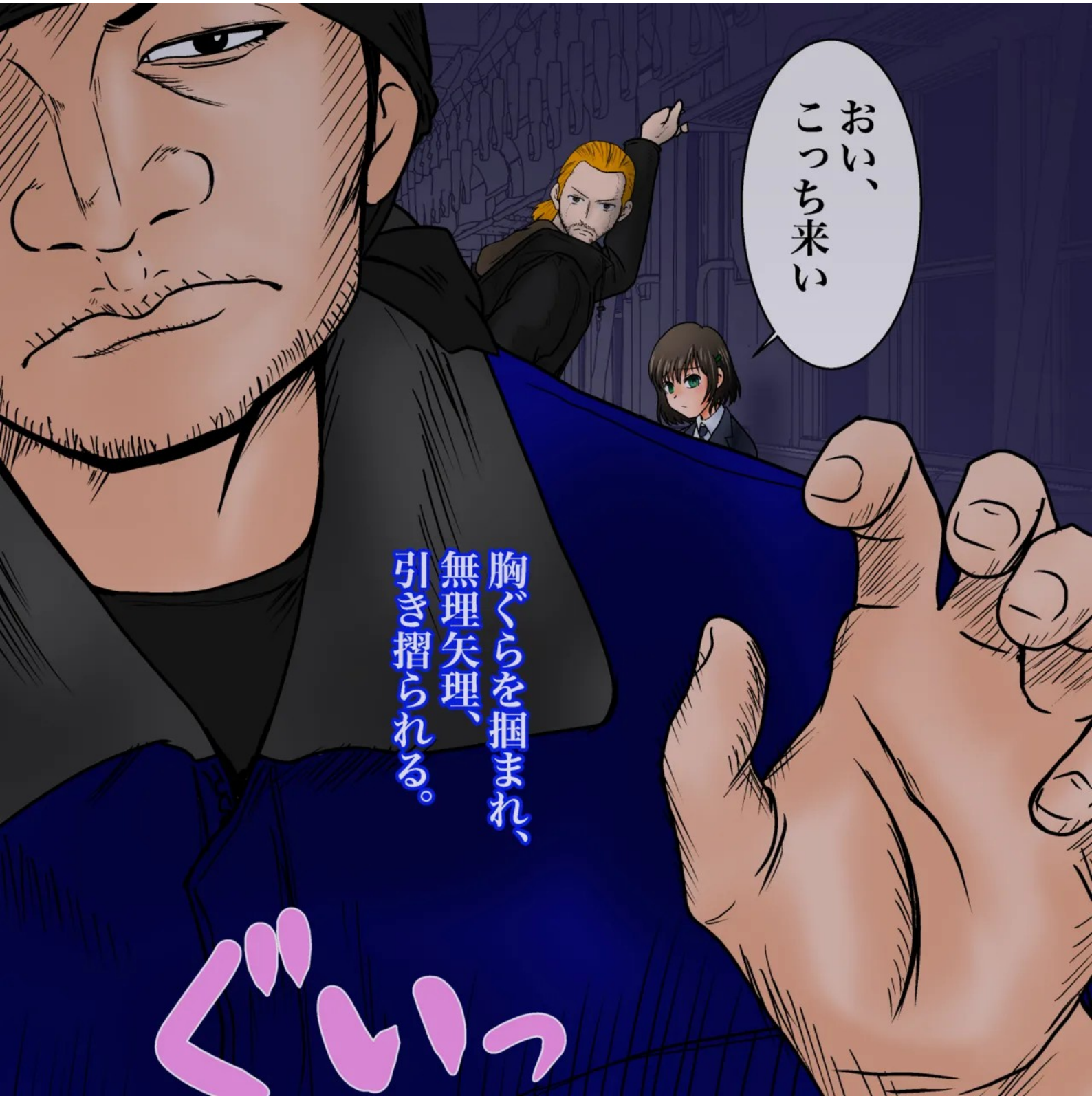
男が睨みながら、  
こちらに歩いてくる。

お前ここで  
何してんだ

見たよな？

いや……  
あの……

いや……何も  
見てません……



おい、  
こっち来い

胸ぐらを掴まれ、  
無理矢理、  
引き摺られる。

ぐいっ

そして、その子の前に  
無理矢理、  
連れてこられた。  
男たちが私の処遇について  
話を始める。  
嫌な雲行きだ。

おい、どうする？  
誰かいるなんて、  
思わないよなあ

ヤツに  
聞くか？

そうだな

男はスマホを取り出し、話をし始めた。

通話を終え、男は言った。

ソイツにもやらせろってさ



男が私の胸ぐらを掴む。  
私は、すごい力で  
羽交い締めになされ  
自由を奪われた。

ぐ

これ、預かるから  
逃げるなよ

動けないところを  
スマホを奪われた。  
まずい。  
逃げられない。

男に頭を小突かれ、  
女の子がひざまずく。



女の子は  
私のズボンに  
手をかけた



カチカチ

私のものを取り出すと、  
手で刺激を与えはじめた。



柔らかく、暖かい手の感触。  
萎えていた私のものも  
徐々に大きくなってくる。



大きくなつたのを確かめると、  
手を止め、ゆっくり舐め始めた。  
いやらしい音が車内に響く。



丁寧な、舌を這わせ、  
焦らすように、ゆっくり  
舐めていく。



舌で丹念に  
敏感なところを舐めると、  
ゆっくり口にふくんだ。  
口内に貯まった唾液が暖かい。



先っぽが、  
暖かく湿った口内に  
包み込まれる。  
いやらしい音が  
車内に響き渡る。



電子シャッター音が  
車内に響く。  
男が、スマホで写真を  
撮っているのだ。

カシヤッ  
カシヤッ

ぐっ  
ちゅ

じゅ  
ちゅ

ちゅ。



動画も撮られている。  
これで逃げることは  
できないだろう。



いやらしい音が響く。  
唾液が口のはしから  
溢れ出す。



ちゅっほ。

ちゅっほ。

ぐゅ

ぐゅ

深く、深く  
くわえこむ。  
喉の奥に  
当たるとような感触。

ピピピピピピ

グググ  
グググ

フフフ

オエ...

ゴゴ...

ググ...



目の端に涙をためながらも、  
深く浅くを、気持ちが良い速さで繰り返す。



ビュルッ トビュッ!

びゅん  
びゅん  
びゅん  
びゅん





口の端から  
溢れた精液を  
丁寧に集め  
指でぬぐいとると  
全て、コクリと  
飲み込んだ。



終わったか？  
じゃあ、  
ここで見てろ

男は、そう言うと、  
スマホをしまった。  
奴は、ずっと動画を撮っていた。  
私は拘束を解かれ、  
脇へどかされた。



スマホを奪われ、  
写真を撮られた私は、  
逃げるわけにもいかず、  
彼女が  
男たちに犯される様を  
見続けた。







欲望を吐き出し、  
中出しし、



それが終わると、  
次の男が、それに続いた。




より乱暴に  
腰を叩きつけ  
精液を体内に  
吐き出した。



男たちは、  
言葉もなく、  
黙々と行為し、  
それを終えた。





私はその様子をじっと見ていた。  
行為を終えた男が  
近づいてくる。

男は、私に向かって、強い口調で言った。

お前もやれ

いや……  
でも……

まあ、  
勃つんなら  
……だがな

気づいて  
ないのか？  
あいつ、  
男なんだ

えっ……  
男？

あいつの男に  
頼まれて、  
こうやって  
犯してるんだ。

あいつら  
変態なんだよ

ヤツは、  
隣の車両にいて  
犯されてるのを見て  
喜んでやがるんだ。

えっ……  
あの子が男つてのも  
信じられないのに  
なにそれ……

信じられなかった。

やはり、どう見ても、  
男には見えない。



その子は、  
上目遣いで私を見ていた。

青臭い匂いが、  
辺りに充満している。  
先ほどの男達との  
痴態が脳裏に蘇る。



聞きました？  
僕と『彼』のこと

すいません。なんか  
巻き込んだりやって

本当だよ。  
犯罪に巻き込まれた  
と思ったら、  
ただの変態プレイだよ。



そう思うと、  
なんだか腹が立ってきた。

チキ

僕じゃあ……  
やっぱり魅力  
ないですよ

どう見ても、男には見えない。  
そして、今、  
私は誘惑されていた。

頭の中で、何かが  
切れる音がした。

相手の体に覆いかぶさわり  
口をふさぎ、手を押しこえた。



手を押さえたまま、  
強引にキスをし、  
首筋を舐める。

ググググ

子  
コ  
コ  
♡

あ♡



甘い吐息が漏れる  
目を閉じる。  
形ばかりの抵抗が  
弱まっていく。





甘い体臭と  
青臭い餽えた匂い。  
熱い吐息が頬を撫でる。

あ♡

ねえ……



いれて……

写真を撮られたことや  
男たちに監視されていることが  
頭をよぎった。  
でも、もう自分の頭では  
考えられなくなっていた。

ハハハ



私は、すでにいきり立っていた  
肉棒を、その、卑猥に口を開けた  
穴にねじり込んでいった。  
それは、すんなりと、  
受け入れられていった。

アッアッ  
グチャッ

んんん

ぬん

んんん

ん♡

んん

んんん

んん

んんん

すでに乱暴にほぐされた穴は私を、すぐ迎え入れ、馴染んだ。私は、欲望のままに、腰を動かした。











あ♡

んんん

んんん

んんん

んんん



行為が終わった後、  
飛び散った精液を  
拭き取りながら、  
荒い息と共に、  
ここから出ていく方法を  
教えてくれた。

後ろの車両から、  
外に出れるから



男から、自分のスマホを返してもらった。  
写真のデータは渡してくれなかった。

私が、この秘密を守らなければ、  
ばら撒かれることになるのだろう。

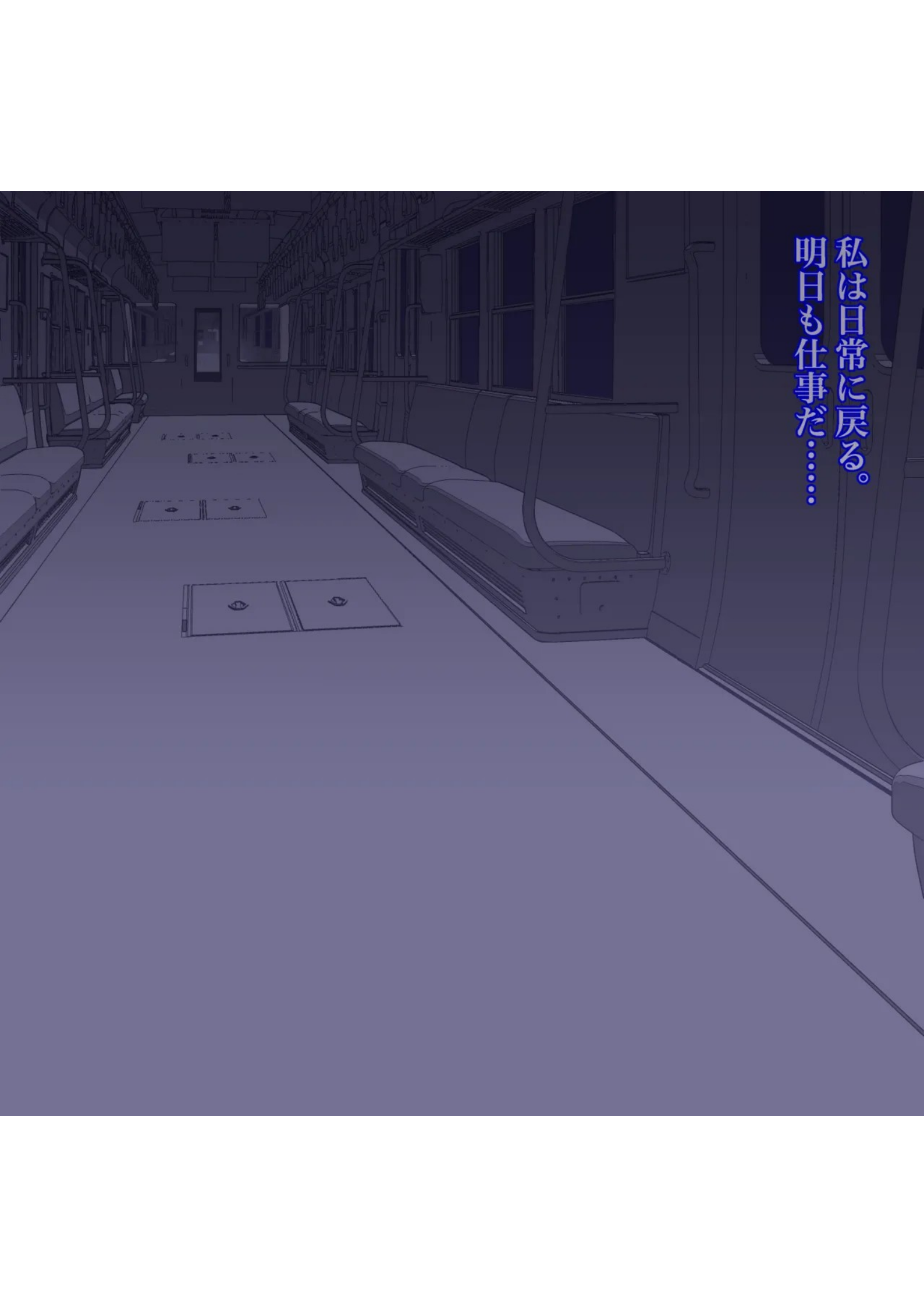


彼らは  
秘密を守るだろう。

今日のことは、  
誰にも言えない。

そして、  
一夜の夢のように、  
思い出すだろう。

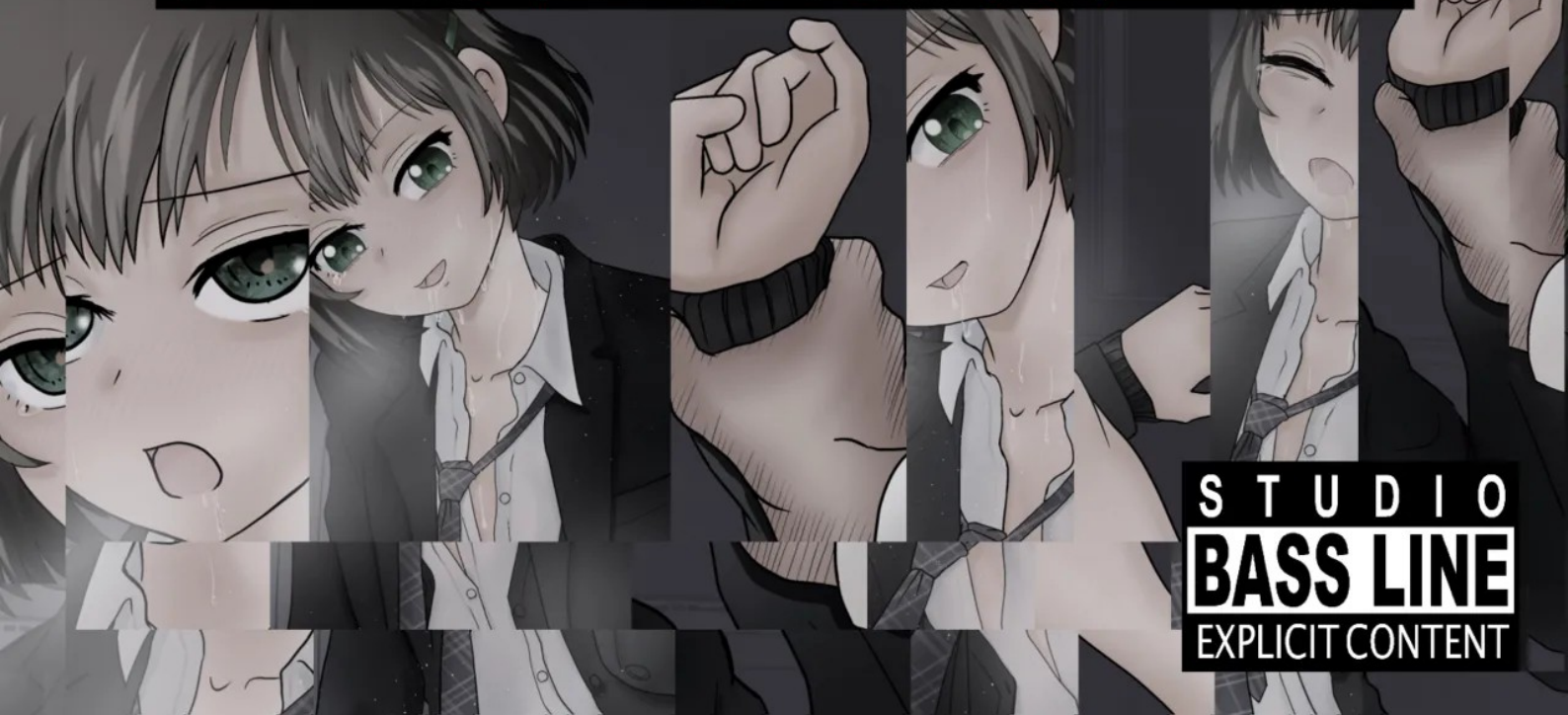




私は日常に戻る。  
明日も仕事だ……



# 男の娘最終輪姦電車



STUDIO  
**BASS LINE**  
EXPLICIT CONTENT

